

文部省特選 芸術祭奨励賞 優秀映画鑑賞会推薦 教育映画祭最高賞・企画賞

東京都教育映画コンクール金賞 キネマ旬報ベストテン第一位 毎日映画コンクール企画賞

アメリカの家庭生活

カラー 3部作



第1部 子供のしつけ 32分

第2部 おかあさんの仕事 28分

第3部 アメリカの若い農家 31分

製作 貯蓄増強中央委員会

製作担当 (株) 桜映画社

製作スタッフ

製作	村山英治
	大西雅夫
脚本監督	村山英治
撮影	小松浩
	加藤和郎
現地協力	ルウス・マシウス
	オズボン美智子
	ウイスコンシン大学
	農村社会学科
編集	沼崎梅子
音楽	原田甫
解説	川久保潔
	小山田宗徳



アメリカの家庭生活

解説

アメリカの家庭生活は、いったいどんなものか、アメリカ人の生活の中で、今日の日本人の生活を考えてみたい、というのがこの企画のねらいです。

従ってこの映画は、単なるアメリカ紹介映画ではありません。アメリカのよいところ悪いところを過不足なく正確に描こうというよりは、彼らから学ぶべき点、彼らなりのすぐれた国民的な伝統を探し求めた作品です。

アメリカの家庭生活のよさは、中流家庭にあるといわれます。勤勉で、生活を楽しんでいる中流階級のごく普通の家庭生活に流れる合理性、規律と独立と愛情は、ヨーロッパからもってきた伝統のように見うけられますが、加えてフロンティア・スピリットといわれる民族的な若さ、バイタリティが特色になっています。

第一部「子供のしつけ」第二部「おかあさんの仕事」は、大都会やその近郊の家庭生活を、第三部「アメリカの若い農家」では、家族中心の経営が特徴で、日本の農家にとって最も身近といわれているウイコンシン州の酪農地帯の農家の生活取材しています。

あらすじ

第1部「子供のしつけ」

ニューヨークをかわきりに、アメリカの中流家庭生活をいくつかたずねてみる。

最初は、ニューヨークの新しい団地アパートに住む若い家族だ。夫は27才、妻は26才で、二人の男の子があるマーフィーさん。二人ともアイルランド移民の二世である。「せまいアパートに暮すかぎり、子供に散らかすなどいってもムリ」と、見ていると、一諸に楽しく本をひいたり、遊んだあと片づける習慣をつけている。子供のし

つけのコツを聞くと『愛情と常識です』と答えた。

夫のダニエルは建築の現場監督だが、もっと勉強して収入の多い地位につこうと、勤めが終ると大学の夜学に通っている。こういう場合の彼らの努力、勉強ぶりには、開拓者の不屈な精神がまだ生きている。

私たちは、中西部の大都会シカゴの郊外住宅エバンストンで、ニューヨークで会ったマーフィーさんたちの5年後の姿を思わせるようなウィルさん一家に出会う。

ウィルさんたちは念願の郊外住宅に越してきたばかりで、家族の手で盛んに家の模様がえをしている。見ていると、彼らは家庭の仕事は何でも小さな子供たちといっしょにやる。

父親のウィルさんの、8才に長男に対する教育ぶりは徹底している。「子供のしつけは親から学ぶもので、本を読んで身につくのは一割ぐらいなもの」と彼らはいう。また「今、小さい子供をきびしく仕込むのは、この子が将来楽しく仕事ができる人間にしたいという愛情にもとづくものだ」と、子供を甘やかさない。

映画は、ウィルさん一家の家庭教育の背景にある、一般の家庭の子供のしつけも描いている。子供は大きくなると欲しいものがふえてくるが、親は買ってやる代りに、どうしたら手に入るか相談に乗って、そのために子供が働くことを激励してやる。

自分の手で得た小さな経済の自立の中で、子供たちの独立心や働く習慣は培われていく。



第2部「おかあさんの仕事」

アメリカの堅実な中流家庭には規律がある。合理性といってもよい。その一つに、主婦の家事のやり方がある。昔は、月曜は洗たく、火曜はアイロンかけ、木曜は買いの、土曜は大掃除などと、一週間の予定はかなり厳格にきまっていたらしい。しかし、今は家事も次第にオートメ化されて短時間で片づくようになって、そういう習慣はくずれてきた。

オティスさんは「家事は女にとってもいやな仕事だが、やらなければならない仕事なので、合理的に片づけて半日でも一日でも、すっかり解放されるためには、やはり



第3部「アメリカの若い農家」

デルトン家は、ウィスコンシン州の酪農地帯では、経営規模もごく普通の若い農家である。夫が30才、妻が28才で、もう5人の子供があり、また1人ふえるという。

デルトン君は、23才のとき同じ4Hクラブの妻と知りあって結婚した。彼は体も大きいのが、よく食べ、実によく働く。経営耕地は80ヘクタール。乳牛を26頭、豚を120頭、鶏を500羽、他に30頭の肉牛と、同数の子牛も飼っている。農繁期には人手もやとすが、これを大体ひとりでやっている。

アメリカの農家が、今日の姿をとりはじめたのは、第一次大戦後で、まず好況の波に乗って自動車が普及し、それにつれて馬耕からトラクターに変わった。農業の機械化は、第二次大戦後もとどまるところなく進んでいる。

さてここに、われわれ日本人の眼には不思議な風習がある。デルトン農場では、町に引退している彼の父親が毎日車で訪ねてくる。

息子が一人前になると両親は近くの町に引退して父と子は小作契約を結び、一諸に働いて収益は厳密に折半する。アメリカは均分相続だが、死後相続する前に、息子は長い年月小作として働いて全農場を両親から買い取って名実ともに自分のものとするわけだ。

私たちは、農場を親から完全に買い取った50才近い自作農ダムダイさんを訪ねてみた。デルトン農場と規模は同じだが、自作農なので収入はほぼ2倍、楽な生活である。

子供を育てあげた40代、50代の農家の主婦は、約半数が勤めに出ている。近くの町に通って、掃除婦、女工、売子、看護婦、秘書等をパートタイムでやっている。

ダムダイさんは、二人の娘が結婚して家を出たら、農

計画性が必要」というが、そのやり方にはアメリカの主婦の合理性が如実に出ていて、じつにムダのない働きぶりである。

こうして生み出された余暇は、一般に娯楽や社会事業や、家庭の外で働くことにも使われている。私たちは或る婦人学級をのぞいてみた。技術を身につけて働こうという主婦、殊に老婦人の姿が目立つ。こういうことから家庭生活の大事な一環として、老後の生活をサン・フランシスコでのぞいてみる。

引退した老人たちは賑かな町の盛場集って余生を送る傾向がある。子供たちが巣立ってしまうと、郊外生活は、家の修理も掃除も厄介、車の運転も面倒になって、町の中でないと暮せない。老人たちは思い出の郊外住宅を売って、そのお金と社会保障などで、盛り場の古いホテルやアパートで暮す。町の中だとパートタイムの勤め口も結構ある。私たちは、こうした老人の中のオスネックさん夫婦と近づくになった。



業をやるだけやってあと農場を他人に売るつもりだと言う。

私たちは10年後のダムダイさんを探した。ロイ・バーデル老60才、3人の娘はとくに嫁いで、広い家には老夫婦2人だけ。農業の仕事はどうにも大儀になったので、いよいよ農場を売りに出すという。こうした農場の売物が、地方新聞の広告に沢山出ている。

アメリカでは、農家の長男でなくても農場をはじめるチャンスはある。しかし最近では、益々機械化し、大きな資本がいるようになって、若者が農場をはじめるのはむずかしくなってきた。



すいせんのことば

荻 昌弘

これは、アメリカ中流人の生活とその意識を、彼らに『親身で切実な関心を持った日本人』の目から冷静に客観視した点、思いがけない新鮮な魅力が生れた異色編なのだった。……撮影陣には、よくこれだけ“ハリウッドも描かぬ”アメリカの素顔をキメ細かくとらえた、と賛辞を呈しよう。

(「週刊朝日」評より、映画評論家)



田辺繁子

これまでの、海外ロケの記録映画が、観光的な興味本位のうわべの観察にとどまったのにくらべて、はっきりしたテーマをもって、内側に入ってあくまでも追求したところに、この映画の画期的な意味があるのではないのでしょうか。そしてありようをそこなわずに素直に描いてみせてくれたのも成功だと思います。

(専修大学教授、評論家)

福 武 直

「アメリカの若い農家」はすっきりとまとまっており、日本の家族生活の今後の問題を考えるうえで、参考になるであろう。

たとえば主要テーマになっている親子関係のあり方などは、新民法による均分相続制の将来を日本の農家について話しあうにあたって、具体的な手がかりを与えてくれる。婦人の地位について考えさせる問題点が少なくないし、生活水準が高いのに日本の農民よりも質素な面もあることも反省の材料になる。いくらでも話題がひき出せる映画であると思うので、そういう眼でよく見ていただきたい。

(東京大学教授)



頒布価格(16ミリ)

第1部	135,000
第2部	135,000
第3部	135,000

株式会社 桜映画社

東京都新宿区西新宿1-22-1
電話(03) 342-5768(代表)